フロンティアスクール報告書

都道府県名	広島県

Ⅰ、学校の概要（平成 15 年4 月現在）

学校名	広島県　竹原市立　忠海東小学校								
学年	１年生	２年生	３年生	４年生	５年生	６年生	特殊学級	計	教員数
学級数	1	1	1	1	1	1	1	6	１１
児童数	3	１３	7	5	１０	１１	1	５０	

Ⅱ、研究の概要

１，研究主題

自ら学び考え表現できる確かな学力の創造

～基礎・基本の定着から伝え合う力・自ら学ぶ力を高めるための個に応じた指導方法の研究～

２，研究の内容と方法

（１）実施学年・教科

・３，４年生複式算数科
　児童の理解の状況を、Ｔ１，Ｔ２でわたりの授業形態で、つまずきの児童に個別支援ができるため。
・５年生・算数
　ＣＲＴテストの結果、児童の習熟に大きな差があり、児童の理解の状況に差が出やすい教科、学年であるため、少人数・習熟度別授業・ＴＴ指導実施
・　５年生・国語
　児童の文章読解力などに差があり、ＴＴ指導・少人数習熟度別授業を実施
・　６年生・算数
　苦手意識を持つ児童にたいしてきめ細かな指導が必要なため少人数・習熟度別授業・ＴＴ指導を実施。
・　６年生・国語
　児童の興味関心に基づいて、児童の学習意欲を喚起するため、少人数・課題別授業・ＴＴ指導を実施

（２）年次ごとの計画

平成15年度

○テーマ

自ら学び考え表現できる確かな学力の創造

～基礎・基本の定着から伝え合う力（国語科）・自ら学ぶ力（算数科）を
高めるための個に応じた指導方法（フロンティア事業）の研究～

○ 研究の見通し

本校では、基礎基本の力の定着にむけ、国語科においては思いや考えをお互いに「伝え合う力」を算数科においては課題意識に支えられた「自ら学ぶ力」をつける必要が明らかになってきた。指導方法についても、多様な指導方法、指導形態の工夫・改善をすることで学ぶことの喜びを感得させたいと考えた。

そこで、本年度の研究主題を『自ら学び考え表現できる確かな学力の創造』とし、サブテーマに「基礎基本の定着から伝え合う力・自ら学ぶ力を高めるための個に応じた指導方法の研究」を設定し、国語科・算数科を中心にして、指導方法の工夫改善を行い児童に学力向上を図ることとした。

○研究の内容・方法

１，国語科における指導

国語科の授業において本校では　話すこと・聞くこと、書くこと、読むこと、言語事項の習熟・定着をはかるだけでなく、国語的表現力を育てること、学ぶ意欲の喚起により学びの楽しさを味わい、進んで活用することに重点をおき、基礎基本の定着をはかり、「伝え合う力」を育てる実践を目指している。

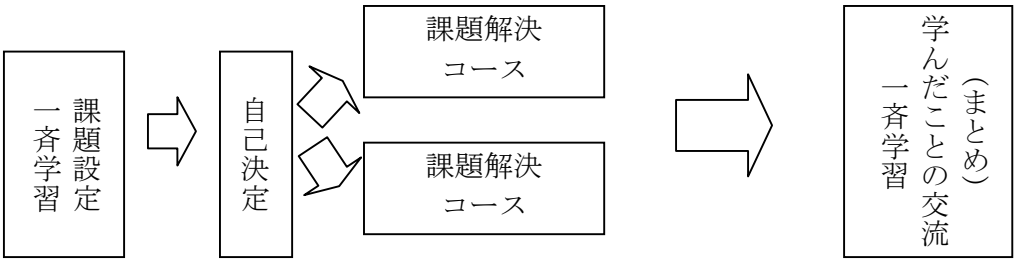
（1）国語科における課題度別指導（５，６年生）

児童の興味・関心を生かしてコースの選択・決定を行い、学習意欲を大切にした個人差への対応をする。また、課題別少人数では、個へのつまずきに応じることはもちろん、基礎基本の定着をはかり、発展的な学習へのチャレンジも考慮し、「わかる」「できる」「生かす」指導の向上を図るようにしている。

（２） 本校の学習スタイル

- 国語科の授業の中で読むこと、書くことの領域においてはなるべく、課題別授業を取り入れるようにしている。
- 問題の場面・課題設定までは一斉学習をし、課題解決において２つのコースを設定する。
- まとめの場面は一斉学習にし、それぞれ学んだことの交流を行っている。

（３） １時間の授業の流れ



２，算数科における指導（５，６年生）

算数科の授業においては、問題解決型の授業をしくみ、個に応じた支援をすることにより自力で問題に立ち向かい解決することで自ら学ぶ力が育つと考えた。つかみ見通す・調べ確かめる・話し合いまとめる・ふり返り発展させるという指導の流れの中で、本校では、少人数のよさを生かし練習問題を何題か用意し、一人ひとりの学習の定着を図っている。

（１） 算数科における習熟度別指導

本校は小規模校であり、学級の児童数は１０人程度である。しかし、１０人の学力差があり１人ひとりの子どもの個人差に対応していくための指導方法のひとつとして問題解決型の授業において習熟度別学習を取り入れることにした。本校では次の３点の個人差を考慮し、習熟度別学習を進めている。

○意味の理解の程度としての個人差
○知識や技能の定着の程度としての個人差
○考え方の傾向としての個人差

（２） 本校の学習スタイル

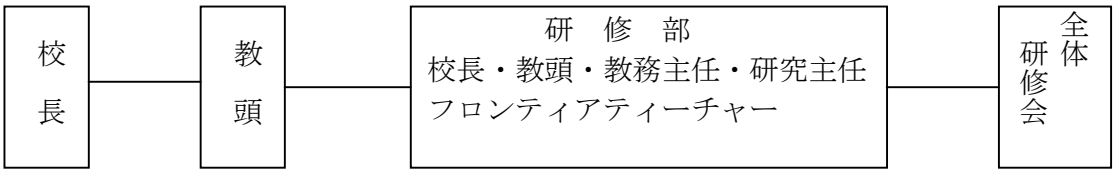
- 問題解決型の授業の中で習熟度別学習を取り入れている。
- 問題場面・課題設定までは一斉学習をし、自力解決において２つのコースを設定する。
- 集団追求・まとめの場面は一斉学習にするという形態をとっている。

（３） １時間の授業の流れ

平成16年度	○ テーマ『自ら学び考え表現できる確かな学力の創造』 ～基礎・基本の定着から伝え合う力（国語科）・自ら学ぶ力（算数科） を高めるための個に応じた指導方法（フロンティア事業）の研究～ ○ 研究の見通し 平成１６年度は、フロンティア事業２年次にあたるため、１年次の研究をさらに進め、国語科・算数科の研究成果をまとめる。また、小中連携、協同授業を実施し児童の実態を交流していく。 ○ 研究の内容 算数科における習熟度別授業（発展的な学習、補充的な学習）を工夫していく。 国語科における伝え合う力を育てるための対話活動をそれぞれの領域の中に有効に取り入れていく。

（３） 研究推進体制

○研究推進組織



フロンティアスクール事業の趣旨を全教職員で共通理解し、落ち着いた学習環境の中で、児童が生活できるようにしている。国語科・算数科の研究内容を、どう実践しているかについては、研究授業で検証、子どもの学力のデータなどをもとに話し合いながら、テーマにせまった授業づくりに努めている。そのためには、研修部の研究の方向性、研究の修正、具体的な授業づくりの案など絶えず緻密な提案をし、全体での研修が深まりのあるものになるようにしている

国　語　科	算　数　科
○伝え合う力を育てる国語科授業づくり ・ 音声言語力「対話する力」の育成 ①相手意識や目的意識を明確にする。 ②目的に応じて伝え合うための方法（メモなどを）を持ち、表現の工夫をする。 ③状況や相手の応じた伝え合いの体験をする。 ④伝え合い（表現・内容）の評価をする。 ・ 聞き方話し方の育成 ・総合的な学習への発展	○問題解決能力を育てる算数科授業づくり ・意欲的に取り組める問題場面の設定 ・楽しく学び高め合う学習活動の工夫 (ア) つかみ見通す…何をするのかつかみ、見通しを立てる (イ) 調べ確かめる…自分なりに調べ確かめる (ウ) 話し合いまとめる…自分なりの考えを発表し、友だちの考えを知る (エ) ふり返り発展させる…学習したことをふり返り学んだことを発表する
指導方法（指導形態・指導体制）の工夫改善を行い、個に応じた支援をしていく。	
○ Ｔ・Ｔによる指導…（a）つまずき解消型 （b）問題解決型 ○均等少人数指導…学級を均等なグループに分け、子どものよさを複数の目で見つけ、育てる ○習熟度別指導…習熟の程度に応じて、支援を受けながら学習を進めるグループと、自力解決グループに分かれて、児童の実態に応じた学習をしていく	
国語科基礎学力づくり	算数科基礎学力づくり

○ 学びタイム…視写、漢字、個に応じたドリル学習（水曜日５校時前半） ○ がんばりタイム…漢字練習、音読練習（国語授業開始５分間） ○ 読書タイム…個人の読書 読み聞かせ（お楽しみ読書 ○表現タイム…朗読	○ 学びタイム…計算練習、個に応じたドリル練習（水曜日５校時後半） ○がんばりタイム…百マス計算（算数科授業開始５分間）

III、平成1 5 年度の研究の成果及び今後の課題

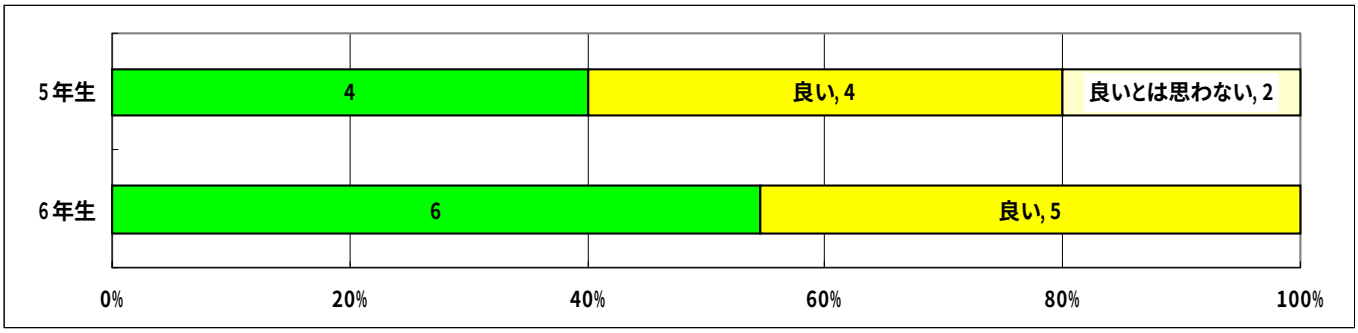
１，研究の成果

① 算数科において自力解決の場で習熟度別学習を取り入れ、自力解決グループとヒント解決グループに分かれ個に応じた支援をしたため、自力解決の見通しをもてない児童が自分なりの考えを持つことが出来た。

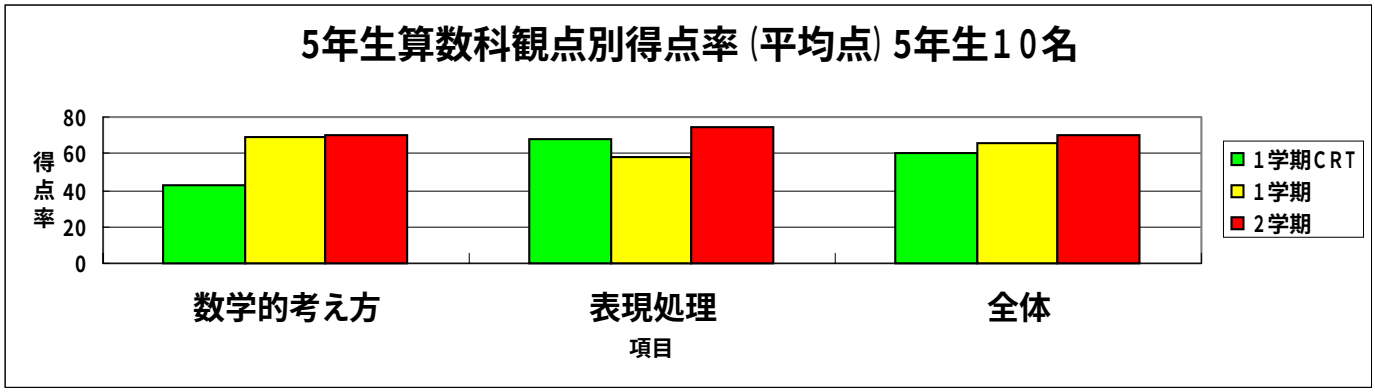
コースに分けておこなっていることについてあなたにとってよいやり方だと思いますか？」

５年生は２名の児童がよいとは思わないと答えている。これは、「問題の聞いてあることが分からない。」といった基礎的なところでのつまずきが見られるためで、よりきめ細かな具体物を用いた指導が必要と考える。６年生は、５年生に比べて学力差が少ないため、習熟度別学習や課題別学習が自分にあった方法であると考えている。

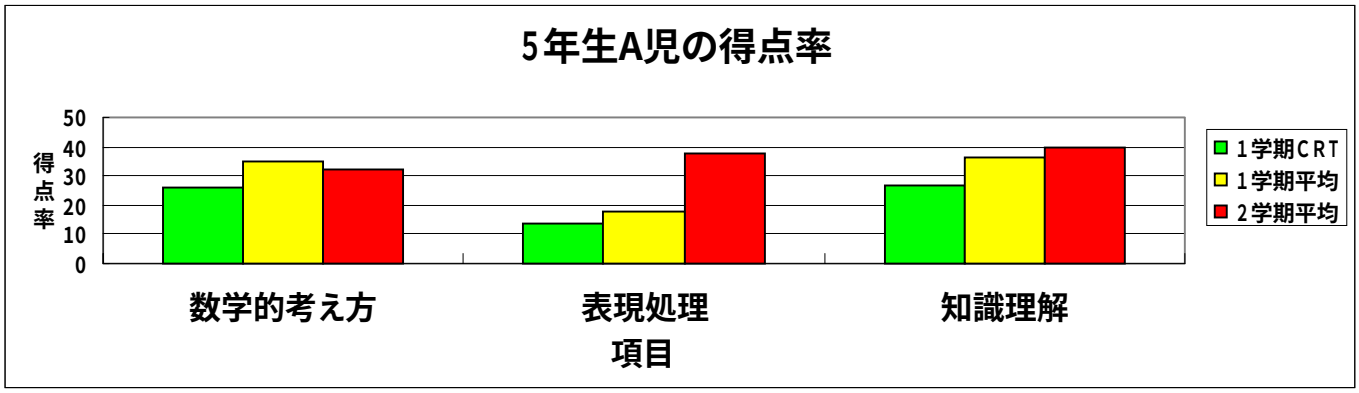
（アンケート対象、５年生１０名、６年生１１名、１２月７日実施）



② 二人の教師で指導することで「分からないことが聞けるのでよい。」ととらえている児童が多く、安心して学習に取り組み、学力向上に役立った。



※算数科５年生、学力層Ｃ層の１学期ＣＲＴ（４月）、１学期末（７月）、２学期末テスト（１２月）の領域、数学的考え方・表現処理・全体の得点率の向上。



（２）今後の課題

①どの単元のどの時間で習熟度別学習をするのか綿密に計画を立てておき、それを実践し、どのような効果があったか記録し、次の指導に生かしていく。

②習熟度別学習の時間が増えた場合、適切なコースを自己決定していく力が一層求められる。自己評価力を育てていく。

③ 習熟度別学習の各コースに適した教具の準備、算数的活動、学習プリントを具体的に位置づけた学習計画を作成しておく。

④ 国語科における課題別授業のあり方を工夫し、児童の興味・関心を高めるだけでなく自ら学び意欲的に追求できる内容にしていく。

Ⅳ、学力把握のための学校としての取り組み

〇学力の定着状況を、定期的に、４月、７月、１２月と年３回、基礎学力定着テスト（計算、漢字）を行うとともに、１年生入学時からの「個人カルテ」に、算数科の基礎学力の定着状況、国語科の漢字力・視写・音読の状況について記入して、比較・検討している。

３年生から６年生の算数科におけるテストの変化を見ると、５年生が、数学的な考え方、表現処理、全体がともに、１学期ＣＲＴと比較して学力の向上が見られたが、他学年もわずかな向上が見られた。

Ⅴ、フロンティアスクールとしての研究成果の普及

※研究会　１，　日時　平成１５年　１２月２日（火）実施
２，　場所　広島県　竹原市立　忠海東小学校
３，　対象　県内小中学校対象
４，　会の目的　フロンティアスクールとしての研究成果、実践報告など

〇 研究会では全体会で、研究主任が国語科・算数科の研究内容について説明し、その後、フロンティアティーチャーが指導方法の工夫改善を行い、子どもたちの反応はどうであったかについて、習熟度別授業・課題別授業を中心に説明した。授業研究では５年生の習熟度別授業を提案した。

〇 忠海地区の小・中学校への研究授業の招待

〇 研究集録の配布（忠海地区の小・中学校・竹原市内の小学校）

①　つぎの項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　☑１５年度からの新規校　☐１４年度からの継続校

【学校規模】　☑６学級以下　☐７～１２学級

☐１３～１８学級　☐１９～２４学級

☐２５学級以上

【指導体制】　☑少人数指導　☑Ｔ、Ｔによる指導

☐一部教科担任制　☐その他

【研究教科】　☑国語　☐社会　☑算数　☐理科
☐生活　☐音楽　☐図画工作　☐家庭科
☐体育　☐その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑有　☐無